世間解　第四五四号
令和七（二〇二五）年　十二月
発行　西法寺

念仏もうさるべし

―よかったなぁー

聴く！せけんげ　YouTube

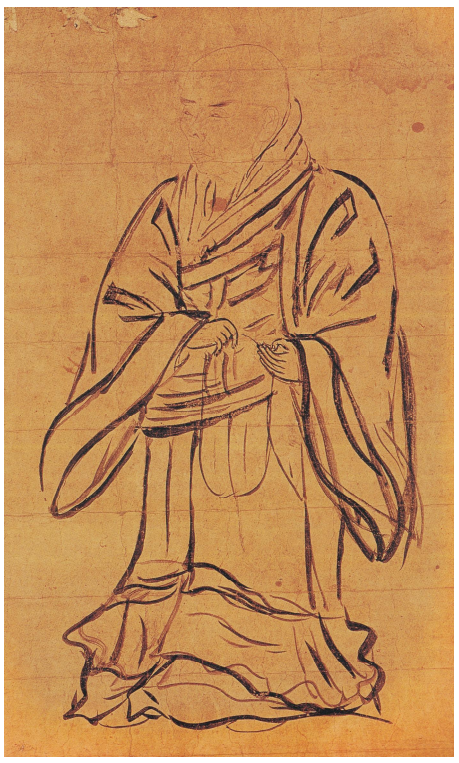
スマホで読みやすい横書き版　note

十二月であります。毎年のように、アッという間に歳の暮れであります。有縁皆さまには変わることのないご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。

浄土真宗の開祖・親鸞聖人が九十年のご生涯をかけてご確認くださり、われわれにお教えくださったことの中心は“私たちは阿弥陀さまに願い続けられている”という一言に摂まるのではないかなとこのごろ味わわせていただいておるのであります。

それは私が何か分かって、理解して…、という体裁のものではありません。何かほのぼのと温かく私を包み育て支えてくださっている本願力のおはたらきが私の心にそのような思いを育んでくださるのだと思います。

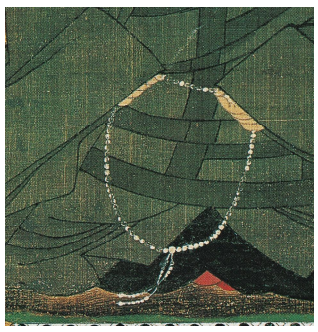
私たちが「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」と称えさせていただけたり、「なんまんだぶやな」と思わせていただけたりするその源にあってくださるおはたらきであります。そこには阿弥陀さまだけではなくて先立たれた、ご往生くださった方々お一人お一人のおはたらきもあってくださっています。



これは西本願寺に伝わる親鸞聖人のお相です。まるで鏡に映したようにそっくりであるというので「鏡の御影」といわれております。親鸞聖人にはいくつのも御影（お姿を写したもの）が伝えられています。

こちらは、「熊皮の御影」親鸞聖人八十三歳の時のお姿です。こちらも西本願寺に伝わっており、前の「鏡の御影」とともに国宝に指定されています。

それぞれの御影の詳しいご説明は又の機会にさせていただければと思いますが、ご注目いただきたいのは親鸞聖人のお手元であります。どちらも右手を上、左手を下にしてお念珠をお持ちになっておられます。



平生われわれはこのようにお念珠を持つことはありません。数珠を繰るなどと申しあげるのですが、これは、お念仏を称えておられるお相であることをあらわしています。

浄土真宗ではお念仏の数をことさらには問題といたしません。一声一声が、阿弥陀さまのご往生くださった方々の私を願い続けてくださっている途切れることのないおはたらきのあらわれと安心させていただくからであります。その上で、お念珠はお念仏の数を数えるお仏具として用いることがありました。「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏を称えながら一声ごとにお念珠の珠を一つずつ繰っていく（つまんでいる指を進めていく）のであります。そうしてお念珠を一回りすれば何回、二回りしたから何回…とお念仏をお称えした回数を計ることが出来るのであります。お念珠を繰っておられる。このときの親鸞聖人さまは間違いなしに「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏を称えておってくださってあります。　このときに親鸞聖人にお念仏を称えさせてくださっていたおはたらきと、今私たちに「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏を称えさせてくださっているおはたらきはまったく同じものなのだよと親鸞さまはお教えくださるのであります。本当に、本当に〝よかったなぁ〟と思います。

なもあみだぶつ